

昭和26年の転校時に高津高校文芸誌「みずかめ」に掲載して頂いた俳句です

2022年12月31日

太田隆次

野口さん、清水さんにならって

俳句や短歌には文章とはまた違う世界がありますね。

私ごとですが、私は高校2年生、3年生の時、家庭の事情には勝てず山本有三の「路傍の石」さながらに、新制中学卒で終わる寸前の羽目になり、見るに見かねた、2年生の時は岡山の実家に、3年生の時は京都の伯母宅に転がり込みました。

添付しましたのは、2年生のはじめに岡山の玉野高校に転校した直後の動転した心情を詠んだもので、高津高校で属していた文芸部「みずかめ」に投稿した所、掲載して頂いたものです。前田要校長の巻頭文もコピーさせて頂きました。、

この二回の転校は長い目で見て、その後の人生にプラスになりました。

時々この俳句を思い出しては戒めにしているこの頃です。

では皆様、よいお年を。（終わり）

雑

詠

太

田

隆

次

秋の海斜に雁が交う鳥のむれ

旅にまゝ友を思ふや秋風裡

水際走るペタルの足に赤トンボ

長嘆息顔上げれば秋の鳥

誠

前 田 要

人の世のもの皆ほろぶしかれども

ほろびざるもの天地にあり

この一首は三十年前、佐々木信綱先生が色紙にお書き下さつたものである。震災にあつた私ではあるが無事に残つて今も嘗てのまゝの啓示にあづかつてゐる。

人の世は定めぬもの、はかないもの、無常迅速、人はもとより、人の営みの多くもまたかたとみなほろびてしまふ。わびしくもつらいことである。

この人生に対して、ほろびざるもの天地にありと不滅不易の天地自然にあらがれるのが人間で、特に多感多情の詩人文人墨客連人の多くはこれをたゞえ、天地の化に参じることを無上のものとしてゐる。われ人共に敬仰してやまぬ李杜、蘇軾、赤人、芭蕉がそれである。天長地久、人生の須臾なるを恨んで羽化して登仙したらもう人間ではない。人間としてほろびぬすべを示し、これを教えたのがこの人達である。詩聖、歌聖、俳聖、聖たる所

以もこゝにある。聖たる道の容易でないことはいうまでもないが、その心構え、ほろびざるもの天地にありと違ひ、天地の心を体して「まこと」に生きる、これはお互にもわかるような気がする。

すべてほろびるお互人間ではあるが、人の世の凡てがいやになるといふのではない。むしろ相いだわり、助け、われを忘れてかりそめのちぎりをこまやかに、なごやかに、喜びと樂しみに満ち充ちたものにして求の間の命を求の間でも長閑にする、こゝに天地と一体の道が開けるものと信じてゐるのは私一人のことではあるまい。折からの新秋、燈火観しもの好時節、「半宵孤影守燈背」と今も詩作思索に余念のない誼友を思ふと感慨限りないものがある。

みずがめ 第五

文化祭

昭和二十六年十月十五日 印刷

昭和二十六年十月二十日 発行

編集人 奥野 王 郎

責任者 上田 喜美子

発行者 大阪府立高津高校文芸部

印刷所 守口市滝井西一三番地

券

堂